

川村清雄《ヴェネツィア風景》



幼い頃から日本画を学んでいた川村は、16歳から3年間川上冬崖について西洋画法についても習得する。明治3年徳川宗家の給費留学生として政治法律研究のため

渡米するが、まもなく本格的な絵画研究に専念、翌々年パリへ、次いでイタリアに赴き、ヴェネツィアの美術学校に入る。この『ヴェネツィア風景』は、1881(明治14)年に帰国するまでの約8年間にわたるヴェネツィア滞在中に、近郊の農家の庭先を明快な色調とすばやい筆致で描写した川村清雄の少ない滞欧作品のひとつ。

作者の正宗は、小説家正宗白鳥の弟で、主に大正期以降の洋画界で活躍し、文筆家としても知られた。彼が初めてフランスへ渡航したのは31歳、1914(大正3)年のことだった。渡欧前から印象派に傾倒していた正宗は、フランスではマティスを訪ねて最新の絵画表現を摂取し、帰国の際に日本へ初めてマティス作品をもたらしている。この作品が描かれたヴェトイユは、モネゆかりのセーヌ川沿いの小さな町。ここで彼は山本鼎や森田恒友らと同宿し、芸術談義に時を忘れる生活を送った。リンゴやナシの花が咲き誇る美しい田園風景が、てらいのない明るい色調で描かれて、生気に満ちた青年画家の気持ちの高ぶりを見ることができるようだ。



正宗得三郎《ヴェトイユの春》